

狂言の鬼の遡源

田口和夫

狂言の中には種々の出自をもつ鬼が共存している。龍とも通ずる「雷」の鬼、蓬萊からきた「節分」の鬼などもあるが、もっとも数がおおいは間魔王として登場する地獄の鬼である。

ここでは鬼狂言とは意識されていない「磁石」「瓜盗人」の片言を通して狂言の鬼の原型を推察し、その源流にさかのぼってみたい。現行「磁石」の中に、磁石の精を蘇生させようとした男がおこなう呪術をこう描写している。「くわっくわっの文を唱へ、磁石が上をあらへはひらり、こちらへはひらり」(岩波・大系)。天正狂言本「ぎしゃく」にも「くわっく」の法をとなふれば、すは人となる」(朝日全書)とあるので、ふるくから「活々」は存在していたとみられる。

また現行では該当するせりふがないが、天正狂言本「うりぬす人」には、かかしを罪人とみたてて演ずることばに、「めっす」っす、あばうらせつのくわしゃく、かくやらん、くわっくのはうをとのふれば」(同前)をいう

所がある。

さかのぼってみると太平記の中に、罪人をきりさいてから「牛頭馬頭ノ鬼共箕ヲ持テ『活々』ト唱テ是ヲ簸ケルニ、罪人忽ニ蘇テ又モトノ形ニナル。時ニ阿放羅刹鉄ノ楯ヲ取テ罪人ニムカヒ、忿レル言ヲ出シテ、罪人ヲ責テ曰、『地獄非ニ地獄、汝ガ罪責ニ汝』(岩波大系・巻二十)という部分がある。この太平記の描写の遡源は往生要集、等活地獄の項にある。うちくだかれ、きりさかれた罪人を蘇生させるのに「獄卒、鉄叉を以て地を打ち、唱へて『活々』と云ふ」と(岩波思想大系)あり、同時にとかれる他の方法より「活々」の方法はよほど具象的であるためか、「地獄草紙」の解身地獄の項にも、罪人をきりきさんだ後、「まないたをうちた、きて活々と、なふれば、またひと、なる」(角川全書)という描写がみられるのである。

このような伝統の上にのせてみれば、天正狂言本「うりぬす人」にのべられる「牛頭馬頭阿傍羅刹の苛責かくやらん」という部分は

獄卒が往生要集以来の地獄のせめをおこなう場面であったことが判明し、このことばもその演技に矛盾しないのである。盗人は獄卒に扮し、「活々」の法によって、かかしには生命がふきこまれうごきだすことになるのである。

それは盗人ひいては観客にとつては、ごく自然な蘇生の術であったといえよう。後世になるとその觀念が消失し、たとえば天理本にみられるように「なにとあやつつタ物じゃやら、いごくが面白」というように、からくりによってうごくのだらうと合理化され「活々」が消滅することになるのである。「ぎしゃく」も事情はおなじである。「活々」の法をとなえただけで、しんだ磁石は「人となる」のである。「すは」という語気はこの両語の間に他の動作がはいるのを拒否して、この觀念はやはり江戸初期には消滅してしまう。たとえば天理本では現行とおなじに「ひらりひらり」なる魂よばいの演技が導入され「活々」は空文となってしまうのである。

ところで「ぎしゃく」の演技は「うりぬす人」におけるような鬼の演技の存在があつて成立するものである。「うりぬす人」も本来の鬼ではないのだから、当然それ以前に地獄の鬼の演技が存在していたことになる。ところが狂言に登場する鬼は天正狂言本でいえば、「さひ人(後の八尾)」のゑんま王と「首

「引」の鬼しもなく、せめの方法は不明なもの、
「活々」の法の場面はないのである。

狂言以前の地獄の鬼の演技について示唆的なのは世阿弥のことばである。世阿弥の力動風鬼についての記述から、力道風鬼(冥途の鬼)が当時の鬼能の主流であったことが知られる(香西精氏「碎動と力動」世阿弥新考を参照)が、その面影は世阿弥時代の「融の大能」「鶺鴒」などの鬼にみられるのである。香西氏「融の大能」(統世阿弥新考)では、融をせめる鬼は「砧」に見る獄卒・阿防羅利などというものなのか(中略)そして亡者の融は舞台に出て、その責めを受けるところを見せるのだろうか」と想像されている。私もそうおもう。同様に「鶺鴒」も本来は亡者の鶺鴒が登場して地獄の鬼のせめをうけていたのだとかんがえたい。さきの太平記の末尾に「地獄非地獄、汝が罪責汝」とあるのも「鶺鴒」の後シテ地獄の鬼のことば「それ地獄速きにあらず眼前のみやうがい、悪鬼他になし」(岩波大系)と共通の論理であり、それは狂言で閻魔王が罪人をせめおとそうとする時のことば「それ地獄速きにあらず、極楽はるかなり、罪人いそげとこそ」(虎明本・あさいな)に展開していくものとかんがえられる。

結論をいそぎたい。世阿弥以前、あるいは

世阿弥の影響下でない能の世界においては、地獄の鬼は盛行しており、それは地獄絵とその絵解を背景として、亡者と鬼とが登場して地獄のせめを実演する素朴で教訓的な場面をもつものであったとおもうのである。そしてその場において笞や棒での苛責や「活々の法」による蘇生がおこなわれていたのであろう。

その能の面影が現在の狂言の中に変形しながらも残存しているのである。たとえば六道の辻に出て罪人をせめおとそうとする閻魔王は地獄の中で罪人をせめる地獄の鬼を、場所をかえ力を逆転させてつくられた一変形とみられるのである。「鶺鴒」の鬼が後に閻魔王とかんがえられるようになることは、はなやかさをもとめてのことであろうが、狂言の地獄の鬼が閻魔王であることとかんがえあわせられて興味ふかいのである。「活々」はより土くさい風流的演技である。能の世界からはやく追放されてしまうのは当然であったらう。

このようにしてみると、狂言における片言隻句、地獄の鬼の演技、閻魔王が登場する筋だてなどは世阿弥以後追放された前代の鬼能の面影を望みさせるのによい手がかりとなるといいうるであらう。

(たぐち・かずお 静岡女子短大助教授)